森を守る取り組み

「センブランド・ヴィダ」

自然の恵を分かち合っていくこと

COP26で発言するマリア・ルイサ環境大臣
（出典 本人Twitter）

地域のしあわせを願うなら、まずは森から。そう思って、地元の子ども会の活動を通して、放置された森の公園を復活させようと私が思い立ったのは、メキシコで実施されている植林活動「センブランド・ヴィダ」の影響があってのこと。「メキシコの人々がそうしているように、私も身近に住む人々と一緒に、森で作業してみたい」。そう思って実際にやってみると、期待以上の楽しさが待っていた。

地域レベルのしあわせは、やがて地球レベルへと広がっていくようだ。2021年、11月9日。メキシコのロペス・オブラドール大統領は、国連安全保障理事会においてメキシコ、グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラスの貧困や治安の悪化に伴い、多くの人々が生まれた土地を離れていく移民問題に触れた。そして、その解決策としてメキシコ南部チアパス州で成果を挙げている「センブランド・ヴィダ」の政策を、中米諸国でも展開するようアメリカのバイデン大統領に提案した。

現在、チアパス州では20万ヘクタールの植林を進め、8万人の生産者が参加し、3万人の若者が報酬を受けとり活動している。

「もしも中米3ヶ国で同様のプロジェクトを展開できるなら、約33万人分の雇用を生み、移民となるのを防ぐ効果がある。さらに雇用の創出、若者の就学を促し、移民や家庭崩壊、社会文化の廃退を防ぐことができる」。ロペスオブラドール大統領は、そう断言したのだ。

森林農法という伝統文化を普及させると同時に生態系を保全し、人々の雇用を生み、若者が地域で暮らし、しあわせな家庭と地域を育んでいく。そんな目標を掲げ進む「センブランド・ヴィダ」。それは単なる自然保護活動ではなく、総合的な豊かさを社会にもたらす政策であり、それに比べれば、私が取り組む子ども会の森の再生活動など、実にささやかなものだ。

けれども、メキシコの国家的プロジェクトも、地域の子ども会の活動も、規模は違えど、取り戻そうしていることは共通している。実際に森で活動していると、不思議と仲間は増え、新たに通れる道が開け、私は実感するのだ。

「ああ、森と人がつながろうとしている」と。

2021年11月10日、COP26でメキシコ環境大臣マリア・ルイサは、「先住民の生活スタイルは、環境保全に寄与している」と強調し、こう続けた。「メキシコの先住民は、自然の恵みを活用し、分かち合いながら、持続可能な生活を続けている。先住民の生活スタイルが、メキシコの大地を守っている。それを手本に、政府は『センブランド・ヴィダ』を推し進めている」と。

現在もその推進力は加速している。2019年7月、メキシコ政府はエルサルバドルとホンジュラスと協定を結び、貧困地域とされるエリアの生産者を対象に、「センブランド・ヴィダ」の導入を開始。参加者数はホンジュラスで5009名、エルサルバドルで7592名に達し、さらに移民抑止効果も確認されている。エルサルバドルでは、参加当初、移民を考えていた人は55・5%だったが、現在は0・6%に減少。同様に、ホンジュラスでは56・4%から1・8%に減少した。少額でも毎月の収入と仕事があることが、生まれ育った土地で暮らすことへの動機付けになっているのだ。

環境大臣のマリア・ルイサが言う「自然の恵みを活用し、分かち合っていくこと」。それが地域の、ひいては地球の大地を守ることにつながっていく。メキシコから発している大きな流れを私も感じながら、ささやかな森での活動を大切にしていきたい。

（ウインドファーム・スタッフ　矢野宏和）